

# 本学教職課程履修生の言語表現の意味理解に関する事例研究

——フッサールの言語論を導きとして——

藤 井 玲 子\*

A Case Study Based on Husserl's Theory of Language:  
How Students at Bunka Gakuen University Teacher-Training Course  
Understand the Meaning of Expressions

Reiko Fujii

**要 旨** 本稿は本学教職課程で筆者が行う授業の受講生がいかに言語表現の意味を理解するかについて筆者自身が綴った記録を基に記述を試みた事例研究である。考察の結果、言語表現に対して表現から想起される個別の状況や対象を見出しつつ表現を理解しようとする受講生の姿が見出された。フッサールによれば、言語表現の本質的な意味を捉えたり論理的思考を遂行するには表現の同一となる意味のみを理解することが不可欠で、それは個別の状況や対象を表象することによっては達し得ない。本稿では最後に、所謂基礎学力不足の解消を目的とすることをも含めた大学等での授業に求められるものについても言及した。

キーワード 大学生 言語表現の意味理解 現象学

## 1. はじめに

昨今、大学生の所謂基礎学力不足が取り沙汰され、高等学校卒業時までには受けた教育の補完や大学教育への橋渡しを目指すべく、大学生のための初年度教育がなされるようになってきている。筆者は日頃大学で授業を行いながら、授業者である筆者の意図が受講生に伝わらないもどかしさを感じることが確かにあるが、それが一体どのような要因によってもたらされているのか、また自分が学生たちに求めている能力とは何なのか、それに応えるとはいかなることなのか、等を考えるとその答えは漠としたまま、教育者である筆者と被教育者である学生との間の接触面は茫漠とした暗がりになり沈み、隔靴搔痒の感が否めなかった。が、ある時一人の学生の振る舞いによって暗がりから一筋の光を見る思いをすることがあった。本稿はその経験に示唆を得、暗がりからほのかな光明を掬い上げる試みである。

本学の教職課程を担当する筆者は、教師、教職、教育制度、教育思想、教育史、道德教育、教科外教育等に関する理論と実践、さらに実践力養成ゼミ等、教育学のかなり広範囲にわたる内容

---

\* 文化学園大学服装学部准教授 教育学

を、入学者が卒業するまでの4年間に渡って講じているが、学生たちに教員としての自覚と資質を高めさせるべく講義内容を理解させるには言語表現や思想の理解が不可欠だと考えている。授業では時に皆でテキストを読み、読み取った内容についてのディスカッションを行うこともある。そのようなある日の授業で、言語表現の理解において学生と筆者との間で根源的な相違があることに気づかされたことがあった。それは現象学で論じられる言語論にかかわるもので、その根源性たるや単に言語表現の理解に止まらず、まさに現象学者フッサールが言うよう、学問の成果を生み出す「理念化」(フッサール 1974, p.411)へと通じるものであり、人間が伝承してきたものを受け取って後代に繋いでいくという、とりわけ教師には要請されるであろう使命に応えるための必要不可欠な内容をも備えたものである、と思わされた。

本稿ではフッサールの言語論を導きとし、本学教職課程で筆者が行ったある授業におけるAさんという受講生の言語表現の意味理解、テキストの読解にかかわる振る舞いを、筆者のそれと対照させつつ記述してみたい。これによって受講生が言語表現の理解、テキストの読解に際して覚える困難の一端が見えてくるであろう。また最後に、所謂基礎学力不足の解消を目的とすることをも含めた大学等での教育に求められるもの、その授業の意味についても言及したい。

## 2、「判断作用」と「判断内容」

### 2-1、受講生Aさんの疑問—2014年7月×日の授業記録<sup>1)</sup>より

本授業で使用したテキストは現象学者内田樹が著した『下流志向』であった。内田はこのテキストで「等価交換」というキーワードを提出している。これは、努力や苦役といった形で供出したものとその見返りが等しくなる、ということで、この「等価交換」モデルに依拠し内田は「二極化」について論じている。これは、昨今は学歴に見合うだけの就職が必ずしも保証されなくなっており、それによって、『『努力が報われたもの』と『努力が報われなかったもの』の間に歴然たる階層格差が生じ』(内田, p.95),「両者の能力や努力の間に有意な差があったとも思われなにもかかわらず、結果としての社会的リソースの配分においては、努力の差の何倍もの差」が現われ、「努力におけるごくわずかな入力差が成果において巨大な出力差として結果」(同上, p.96, [強調点は原文のまま])し、二極分化が生じることがある、ということである。

この論に対してAさんは、「両者の能力や努力の間に有意な差があるとは、比較できるものではないと思う」、とレジュメに書いてきて疑問を呈した。そしてその疑問の詳細を他の学生たちに問われ、「その人の努力は比べられるものじゃないし、なぜ比べたのか。学校では努力してなくても家で努力してる人は傍から見たら見えない。なぜそれを同じぐらいだと言ったり比べるのが疑問。誰にも見えていないものなのになぜ比べる。(就職試験の)面接でベラベラ喋って落ちたとかってこともある」、と発言した。

「能力」、「努力」、という言語表現に接して人はどのようにその意味を得ようとするのか。筆者は内田の文章を読んで、「学校では努力しなくても家で努力する」「努力」とか、「面接でベラベラ喋って」しまつて測られてしまう「能力」等、それらの言語表現から表象される個別の状況を思い浮かべることはしなかった。筆者とAさんの言語理解の差異はどのようなものなのか。そし

てそれは読解や思考とどのようにかかわるものなのか。先ずは、言語表現の意味理解における「判断作用」と「判断内容」に関するフッサールの思索を基に考えてみたい。

## 2-2、「判断作用」

フッサールは言語理解において「判断作用」と「判断内容」という二つの概念を抽出し峻別した。以下、両者について述べる。

例えば私が、「労働とは本質的に等価交換ではない」と言表する場合、当然私はそのように判断しているということが根底にあり、また、私がそのように判断したということを聞き手は誰しも知っている。つまり私はこの言表によって、私がそのように判断したこと、すなわち私の判断という心的作用を告知している。

この、判断という心的作用について考えると、誰かが例えば、「労働とは本質的に等価交換ではない」という言表によって告知したその人の心的作用としての判断、すなわち「判断作用」は、この言表をその人が発するたびに異なっている。この言表を為すその人の「判断作用」は、例えばこの事態に経済学的な確信を持っているか、あるいは単にこの命題を暗記しているか、等等によってその都度異なっている。つまり、ある言表に伴う「判断作用」は、言表の内容がたとえ同じであっても、人によって、あるいは同じ発言者でも言表を発した時間によってすべて異なる、と考えられる。

## 2-3、「判断内容」

これに対して、言表の内容、すなわちここでは、「労働とは本質的に等価交換ではない」という内容自体は、「誰がその言表を主張しようと、またいかなる状況、いかなる時に彼が言表しようと、同一のもの」であり、ここには「判断作用や判断者については、全く何も発見されない」（フッサール 1970, p.54）。フッサールは、いまここであるものとしてその都度異なる「判断作用」と、それが判断するもの、言表が言い表しているもの、すなわち「判断内容」とを明確に区別し、後者が常に同一の意味を保持するということは、そこで述べられていることが「たとえ誤りであろうと、あるいは全く不合理であろうと、どの言表の場合もそうになっている」（同上, p.55）、と述べる。つまり、「労働とは本質的に等価交換ではない」という命題の真偽にかかわらず、この言表には同一<sup>2)</sup>となる意味が保持されているということで、こうして、言表を行なう時の心的作用としての「判断作用」と、言表が言い表していることとしての「判断内容」が区別されることとなる。

あらゆる表現において「判断内容」が「判断作用」とは区別されるものとしてあるということは、すなわち、どの表現も心的作用とは関わりなくそこから独立して、「判断内容」としての常に同一となる意味を持つ、ということである。例えば「獅子」という語は日本語においては一度だけしか現われてはこないのであり、「この語は任意の人によるその無数の表出において同一」（フッサール 1974, p.390）となる。「能力」や「努力」という日本語も然りである<sup>3)</sup>。

## 2-4, Aさんの意味理解の仕方

Aさんは内田の文に現われる「能力」や「努力」という表現に対し、学校で努力しないで家でする「努力」とか面接でべらべら喋ってしまっただけで測られる「能力」とか、その表現によって想起された個別の状況をありありと語ったが、一方筆者は同じ表現に接してそれらが示す或る個別の状況を思い浮かべることはせず、Aさんとは別種の理解を遂行していた。Aさんが言う個別の状況は、彼女がこの表現から得た彼女の「心的体験としての判断」(フッサール 1970, p.54), すなわち「判断作用」である。しかし筆者はこれらの語の意味を理解するに当たってみずからの「判断作用」に立ち帰ろうとはしない。

フッサールによれば、「判断作用は、言表が陳述し、・・・表現しているもの・・・ではない」(同上, pp.53-54, [強調点は原文のまま])。なぜなら、Aさんが述べたような「判断作用」が「生成消滅する一時的な体験」(同上, p.54)であるのに対し、「能力」「努力」という表現それ自体は、表現された時間、表現された時の状況に関わらず常に同一のものであるからで、筆者はこの授業の中でこれらの表現を、その表現のうちには、「判断作用」や判断者については全く何も発見されないようなものとしてAさんに理解してもらいたかったわけである。その時の筆者はこれらの表現に様々な「判断作用」や個別の一時的な体験を見出すわけではなく、表現の意味を「多様性の中の統一」(同上, p.55)として「判断作用」から区別している。

Aさんは心的作用とは独立した意味だけを捉えるということとはせず、ある表現によって語られたり記述されたりしている事態や事柄そのものを捉えながら表現を理解している。現実世界で起こり得る多様な事態や事柄を想像し、その多様さ故に、「その人の努力は比べられるものじゃないし、何で比べたのか」との疑念を抱いた。彼女のこの言葉通り、無限に多様な「判断作用」によって表現の意味を理解する場合、その表現が含まれた命題に対し、それが表出にもたらされるだけの意義も認められなくなるであろう。

## 3, 論理的思考

言語表現とのこのような付き合い方は論理的思考にも影響を与えようと考えられる。

### 3-1, Aさんのもう一つの疑問

Aさんは同日同授業でもう一つの疑問を呈していた。それは、「労働というのは本質的にオーバーアチーブ」(内田, p.163, [強調点は原文のまま])である、とする内田の考えに関わる疑問であった。これは、本質的に「賃金というのは労働者が作り出した労働価値に対してつねに少ない」(同上, p.162), つまり前述の「等価交換」モデルと対比的に言えば、「等価交換」モデルが努力や能力と成果がイコールで結ばれるのに対して、努力や能力が常に成果を上回る、という図式で捉えられる考えであると言える。Aさんはこの考えを読み、天秤ばかりの絵を使って二種の図式を上と下に描き分け、周囲に促されて次のように自らの疑問を語った。以下便宜的に、「労働は本質的にオーバーアチーブである」を「オーバーアチーブ」命題、「等価交換」モデルを「等価」命題と略す。

Aさんの発言はこうだ。「下(=「オーバーアチーブ」命題)はこれが当たり前だから(能力

や努力が成果を上回るのだ、と) 諦めてるってのはわかる。基本であるからこれは動かせないから。なぜ(「等価」命題について論じる件において)『学歴と見合った就職をそろえたい』と言ってるのかわからない。別にこう(=「オーバーアチーブ」命題で言われるように能力や努力が成果を上回る状況)でいいじゃん、って思う」。つまりAさんは、「オーバーアチーブ」命題と「等価」命題は矛盾するのだから、著者が当たり前と見なしている「オーバーアチーブ」命題のみを論じて「等価」命題は論じるに及ばない、論じることに意義はない、と考えていた。彼女のこの疑問は筆者にはかなり不意打ちに感じられた。

我々の相違を整理すると次のようになる。「オーバーアチーブ」命題であれば「等価」命題は成り立たない、つまり両者が矛盾することは筆者もAさんも認めるという点で一致する。しかし我々が異なるのは、矛盾するのであればわざわざ後件命題について論述する意義があるか否か、という点で、Aさんは意義がないと考え筆者は意義があると考ええるということであり、そしてもう一つの相違点は、筆者の場合はそもそも、「オーバーアチーブ」命題であれば「等価」命題は成り立たない、ということが意識に上ることすらない、という点である。

まずは、後者の相違点、つまり筆者はなぜ、「オーバーアチーブ」命題であれば「等価」命題は成り立たない、という考えを意識に上らせることがなかったのかについて論じる。そのためにまずは先ほどの「判断作用」と「判断内容」に関する議論におけるフッサールの術語、「同一」について詳述してみたい。

### 3-2. 意味の同一性

前節において筆者は、「判断内容」は「誰がその言表を主張しようと、またいかなる状況、いかなる時に彼が言表しようと、同一のもの」であり、ここには「判断作用や判断者については、全く何も発見されない」、とするフッサールの言葉を引用しつつ、いまここであるものとしてその都度異なる「判断作用」と同一の意味を保持する「判断内容」との区別を論じた。「判断内容」が同一の意味を保持するとはどういうことか。「赤」という言葉に関するフッサールの思索を基に考えてみる。

我々がある客観を「赤」と命名する場合、「赤」という言葉はその客観に現出している赤の契機によってその客観に属している。しかも同じ種類の契機を内蔵する客観はどれも同じ言葉で呼ばれる資格があり、そのどれにもこの同じ言葉が属している。すなわちこの言葉は同一の意味によってそれぞれの客観に属しているのである。では、同一の意味によってこのように命名するとはどういうことであろうか。この言葉によって思念されているのはそこに現出されている赤である。言葉はこのような命名的思念という仕方でも命名されたものに属し、そしてそれと一体になっているものとして現出する。「赤」という言葉は無数に異なる様々な客観を命名することが可能である。つまり、同じ言葉がそれ自身の統一的な意味によって、観念的に明確に限定された範囲内の様々な直観を包括し、そしてそれらの各客観が同じ意味の認識作用の基盤として機能しうる。「赤」という言葉には、実在の客観のみならず無限に可能な直観のうちに与えられる、あらゆる赤い客観を一様に「赤い」と認識し、かつまた「赤い」と命名する可能性が属している。し



かもこの可能性には、アプリアリに保証された次のような可能性が更に結びついている。つまり、そのような諸認識を同一化し綜合することによってこれとあれとは意味的には同じものである、この固体も赤いが、あの個体も同じ、すなわちあれも「赤い」、したがって直観されるこの二つの個体は同じ概念に属するということを意識する可能性である (cf. フッサール 1976, pp.43-46)。そしてこれによって初めて、同じ概念に属するとされる客観相互の比較考量も可能となる<sup>4)</sup>。

ここにおいて、フッサールが「同一」と言うその内実は、実在するものに止まらず可能的なものまでも含めた様々に異なる客観に対する認識を綜合するものとしての「同一」であることがわかる。そしてこの思索に導かれて、あらゆる表現にアプリアリに備わっている、同一化とも言うべき一つの作用が見出された。ここで、前述の「判断内容」とはこの作用を含み込んであるものだという事に留意したい。同一化の作用に着目しながら、以下においてAさんと筆者の相違について考察を試みる。

### 3-3、意味の同一性と論理的思考

同一化の作用によって、「オーバーアチーブ」命題も「等価」命題もこれらの表現は無数に異なる様々な「判断作用」に対して命名することが可能となる<sup>5)</sup>。また命題は、この考えが初めて脳裏に浮かび上がった最初の「判断作用」の一時的な意味契機ではなくなり、更にその後の諸段階でも論理学的反省が反復遂行され、そこでも「同一」の意味として引き続き思念されるものとなる。例えば、ある命題を受けて「それゆえ」と言えるのは、前件命題の「同一」となる「判断内容」を反省しているのであり、「判断作用」ではなく「判断内容」を顧慮することによってのみ後件である結論命題は動機づけられ現出する。そうすることで初めて、前件命題の論理的形式は後件命題を洞察的に規定するようになりうる (cf. 同上, p.115)。

筆者がAさんと異なり、「オーバーアチーブ」命題であれば「等価」命題は成り立たない、という考えを意識に上らせないのは、「オーバーアチーブ」命題、「等価」命題、という二つの表現を常に「同一」のものとして「判断内容」のみにによって理解しているからで、そうであればAさんとは逆の意味で、相互矛盾を来すこの仮定の論理的連関を持つ考えは関心を惹くだけの意義がなくなる。逆の意味で、とはどういうことか。論理的連関における「同一」の意味について、フッサールによる仮定の判断に関する思索を基にさらに考えてみる。

フッサールによると、仮定の論理的連関を持つ、例えば「任意の三角形の内角の和が二直角に等しくないとするれば、平行の公理も妥当しない」といった判断がなされる場合、「前件の陳述していることは、仮定的前提を行う…(判断者の)心的作用ではな」く、判断者は前件に述べられているような「不等性が存立すると主張しているのではな」い、と言う。前件で表現されているのは「仮定一般」である、と (フッサール 1970, p.56, [括弧内は筆者、強調点は原文のまま])。

Aさんは相互矛盾を来す両命題をそれぞれの事態の存立を認めながら意味理解をすることで、「オーバーアチーブ」命題であれば「等価」命題は成り立たない、という考えを意識に上らせた。意識に上らせるに足るのは、このことを理由として後件命題について論じる意義がないとの

Aさんの主張に繋がるからだ。一方筆者の場合はこの仮定の論理的連関を持つ考えの前件命題の「同一」となる「判断内容」のみを反省する、つまり前件の表す事態の存立を主張することではなく、まさにそうすることによって仮定という論理的形式が後件命題を洞察的に規定し得るようにならしめる、つまりここでは、相互矛盾を来す両命題を並べるに意義がないことを洞察し、この考えを意識にもたらすことがない<sup>6) 7)</sup>。

### 3-4、表現の意味と対象

最後に、この仮定の論理的連関を持つ考えをめぐるもう一つの我々の相違、つまりなぜAさんは「等価」命題を論じる意義はない、と考え、筆者は意義がある、と考えるか、について考えてみたい。前項で論じた通り、筆者は、「オーバーアチーブ」命題であれば「等価」命題は成り立たない、という考えを意識に上らせることはないし、たとえAさんに促されて意識に上らせ同じ人物によって両命題が言表されていることを強調されたとしても、Aさんのように「等価」命題を論じる意義はない、との結論を導くことはない。なぜか。キーワードは「対象」である。

前項での考察で、Aさんはこの仮定の論理的連関を持つ考えの前件である、「労働は本質的にオーバーアチーブである」という事態の存立を認めつつ判断することを論じたが、Aさんはさらに、内田という人物が「労働は本質的にオーバーアチーブである」、と考えている、という事態の存立をも認めながら判断しているのではなかろうか。

表現とは何らかの対象を示すために意味を指示するものだろうか。フッサールはこのような考え方を否定して、「対象と意味とは、決して一致するものではない」(同上, p.57)、と言う。そのことは例えば、たとえ同じ表現でもそれが指示する対象が異なる場合もあることからわかる。フッサールの挙げる例で言えば、「馬」という表現により、一方では単なる馬車馬が指示される場合もあれば、ある特定の歴史上の名馬が指示される場合もある。また逆に、「等辺三角形」と「等角三角形」のように、表現が異なってもその時に志向される対象が同じになる場合もある。つまり、言語表現は対象関係が実現されておらずとも十分に理解できる、ということである (cf. 同上, p.58)。「丸い四角」とか「千角形」とか、対象が見出せない場合や対象を見出すことが非常に困難な場合でさえ、われわれは表現の意味を容易に理解できるのだ。

「オーバーアチーブ」命題と「等価」命題は相互矛盾するものであった。ある人物が「オーバーアチーブ」命題を主張し表出するという事態は対象として見出すことはできるが、それとは相反する「等価」命題をその同じ人物が表出するという事態、つまり相互矛盾を来す両命題を同一人物が表出するという事態は対象事態として見出しにくい。Aさんの、「別にこう(=「オーバーアチーブ」命題で言われるように能力や努力が成果を上回る状況)でいいじゃん、って思う」という発言は、「こう」ではなくこれ以上のこと、つまり「オーバーアチーブ」命題をそれを為した同一人物が否定するということを為せば対象事態が消失することによる。一方筆者が、相互矛盾を来す二つの命題を含む仮定言表を意識に上らせたとしてもAさんのように後件命題を論ずる意義はないと思わないのは、仮定言表が表す対象が不在のままでその表現の意味を理解するから、つまり表現の意味理解において対象を見出さないまま表現と付き合っているからであろう。

#### 4、おわりに― Aさんの言語理解が教えるもの、現象学、そして授業

ここまでの考察を経て、Aさんの言語表現の理解の仕方の一端が明らかになった。Aさんは言語表現に接してその表現が表す状況をありありと表象し、その表現の内容や表現行為そのものに個別の事態を見出し、表現が示す対象と結び付けながら、表現を理解しようとするのであった。

ところで、本授業においてAさんが「等価」命題を論ずる意義がないと主張した時、筆者は違和感を覚えると同時に、我々が住み込んでいる現実世界において「等価」命題の成立は偶然的なことに過ぎないのだ、との説明を試みた。つまり、著者である内田の頭の中では、「オーバーアチーブ」命題は当然のこととしてあり「等価」命題は偶然のこととして次元が違うものとして整理されているのだ、ということを強調したのだった。所謂先進国と途上国とか貧と富といった区分によって隔てられる二者のネガティブなもたれあいが一者に「等価」という状況を偶然的にもたらしめているということは明らかだ。筆者の思考は、「オーバーアチーブ」、「等価」、二つの判断を大枠の中で捉えて分類し、両者が同じ著者によって論じられる妥当性を後付け的に根拠付けようとしたものだった。しかしAさんは真正面から読解に取り組んでいた。語彙使用のレベルから違和感を持ち、それと同じ目線で著者の論の展開の仕方に納得が持てなかった。テキスト読解の意義がもし批判的な目を養い貫くことであるのなら、Aさんはその勇気を持ち備えていたとも言えるであろう。そして、授業と考察を経た今、本授業のテキストの著者である現象学者内田の、論述を通しての振る舞いと、筆者が本授業において為した振る舞いととの共通性がアナログカルに捉えられるように思われてくる。

本テキストの主旨は、昨今学びから逃走する若者が増えているのは、彼女ら彼らが幼い頃から自らを消費主体として立ち上げているからだ、というものであるが、はたして本テキストは、学びから逃走しているとされている若者に首尾よく伴走し得ているだろうか。Aさんの疑問は哲学者などの著述家が暗黙の了解として持っていてしまっているものを問うものだった、と筆者には思える。努力と成果が本質的にイコールで結ばれるものではないことがわかっているのになぜイコールであることについて論議するのか。イコールでないことがわかっているのならそれを済まして先に進めばいいはず。イコールであるべきとか、イコールになっていないことはどうであるとか、それを主題化した上での是々非々、現状分析等々はAさんにとってはいかにもまどろっこしいものに思えるだろう。その議論の意義や目的がわからないであろう。内田は子ども・若者が学びから逃走しているのは早くから消費主体として自己を立ち上げているからだと主張するが、そもそも、現象学が説く、言語表現の意味理解が示唆するもの、つまりある種の言語理解は通時共時、存在不在非在をも含めた可能性という外に開く通路を見出しにくくしてしまう、という議論が示すように、そのような言語理解を行う読者に対して内田は現象学者としての橋渡しをする努力を怠っている。学びからの逃走は、消費主体にまつわる諸々として対象化することによる還元と伴走させると、その現象的本質を見誤るのではなからうか。Aさんはそれを端的に示してくれた、と今は思える<sup>8)</sup>。

Aさんの指摘を受け、筆者は、内田は本テキストで現象学者として緻密な論を展開していなが



ら、実のところ、「現象学は一つの学説もしくは体系である以前に、一つの動き」（メルロー＝ポンティ、p.26）であり、「哲学は、いっさいの認識に向って投げかける問いを、自己自身にも向けねばなら」ず、「限りなく自己自身に立ち戻り、フッサールのいう終りなき対話、終りなき省察となる」（同上、p.25）、と現象学者のメルロー＝ポンティが言う如く、現象学者は自らが現象学を遂行すべく自己自身に問い続ける存在である、という最も根幹の部分に違背していると思うようになった。それは、本人が意識するしないにかかわらず、テキストを内破する形で文字通り実践的遂行的に内田という現象学者の振る舞いを明るみにもたらしテキストに関わろうとしていたAさんの姿の反照として筆者に見えてきたものであった。

本授業をAさんとともに受けているある学生が、Aさんの発言から3ヶ月遡ったある日の授業でこのような発言をした。「学校や先生がどれほど『この授業は大切な授業だ。欠席しないように』、と言っても、その大切さがわからない学生はわからないから授業に来ないし、わかる学生はわかるから来るわけで、そうやってその差はどんどん広がっていく」。この学生は教えること、学ぶことの根源的な逆説<sup>9)</sup>に気づき指摘したのであったが、テキストの著者が読者との実践的遂行的な相互関係の中で絶えることのない道程を歩み行く如く、（大学）教育に携わる者にも、まずは本源的に教えるという営みが抱え込んでいる矛盾を認識し、絶えることのない学生との対話に歩み行くことが求められるだろう。現象学が教えるところに従えば、テキストを読むとはそれを一つの学説や体系として理解することでもなければそれを行動の規範とすることでもない。同様に、授業も、テキストを、また教育の矛盾を、内破する営みとしてあるのではないだろうか。

Aさんのような言語理解の仕方は他者理解や事物認識にもかかわってくる。これらの実践的解明を今後の課題としたい。

## 謝辞

発言記録の本稿への掲載をご快諾くださったAさんに感謝申し上げます。

## 註

- 1) 授業記録は授業直後に筆者が綴ったもの。
- 2) 「同一」についての考察は後述。
- 3) 言語活動において、心的作用から区別されるところのこの常に同一となる意味、すなわちことばの概念的な意味を、単なる音声や文字記号に与える作用をフッサールは「意味付与作用」と呼び、これが我々の言語活動において最も「本質的な作用」（フッサール 1970, p.48, [強調点は原文のまま]）である、と見なしている。
- 4) この認識作用と顕在的な分類作用は異なることに留意されたい。尚、対象と意味の関係については3-4にて論じる。
- 5) 命名がなされるとはすなわち同一の意味の下にそれぞれの対象が相互に比較考量されることも可能となるということである。

- 6) 本稿ではここまで「赤」のような名辞的な表現と命題的な表現を同列に捉えて論じてきた。フッサール自身は『論理学研究』において両者を区別して記述しているが、本節で焦点化されている「同一」に関しては、名辞的、命題的にかかわらず共通する概念であると考え、「赤」という表現に関するフッサールの思索を援用した。
- 7) 「赤」という同一の意味を理解することによって、主体はその意味の理解と同時に、色覚・知覚なるものを感じ得ているとも言えよう。同様に論理的なテキストにおける命題の場合、主体はその命題の同一の意味を理解することによって、例えばその命題が仮定命題であれば仮定を、類比命題であれば類比を感じ得る。こうして同一の意味の理解はあらゆる論理的思考を基づけるものであると言え、このような理解の仕方がフッサールの言う、「命題の継承や、つねに新たな命題や理念性を論理的に構築しうる方法の継承」(フッサール 1974, p.401) に繋がると考えられるが、これ以上の考察は紙幅の関係で別稿に譲る。
- 8) Aさんが学びから逃走している、と言っているわけではない。
- 9) プラトン 2001, pp.45-46 参照。

#### 引用・参考文献

内田樹 2009:『下流志向』講談社文庫

フッサール 1970:『論理学研究 2』立松弘孝・松井良和・赤松宏共訳 みすず書房

フッサール 1974:「幾何学の起源について」 in 『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』細谷恒夫・木田元共訳 中央公論社

フッサール 1976:『論理学研究 4』立松弘孝訳 みすず書房

プラトン 2001:『メノン』藤沢令夫訳 岩波書店

メルロー＝ポンティ 1982:『知覚の現象学』中島盛夫訳 法政大学出版局

#### 付記

本稿は2014年9月19日に行われた第48回学内研究発表会(服装学部)での発表をもとに大幅に書き直したものである。当日会場にて頂いたコメントが非常に有益であったことを謝してここに記したい。